

「物語」を聞く浮舟

——「ついで」を手がかりに——

小泉 咲

はじめに

『源氏物語』の浮舟は、作中でそのあり方が既存の物語作品に重ねられることが多く、また人々の世間話という「物語」の中で語られることも多い女君の一人である。本稿は、物語世界内における「物語」なるものにはいかなる意義があるのか、という問題意識に基づくものであり、これまでも拙論（小泉「二〇一七」、小泉「二〇一八」）において考察を試みてきた。本稿もそれに連なるものとして、「物語」との関わりの深い浮舟に着目し、「ついで」に語られ、かつ「物語」を聞く浮舟について考察した。

浮舟と「物語」との関わりの深さは、諸先行論によっても数多く論じられるところである。浮舟の物語が『竹取物語』等の既存の物語作品を引用していることは、宗雪「二〇〇二」、井野「二〇一一」等によって論じられている。また、浮舟は人々の物語すなわちうわさや世間話といったものの中で語られる女君でもあり、その存在が示される当初から、薫と中の君の語りの中からもあらわれてくる。安藤「二〇〇六」は、浮舟失踪後の情報の伝播に関し、「浮舟不在の物語の中で流通する〈うわさ〉は、浮舟不在を語る〈うわさ〉」物語へと成長（肥大）し、続く「手習」巻で物語そのものとなつてしまふかのようである」と指摘する。浮舟について語る人々の「物語」が、『源氏物語』そのものにも重なりうるという指摘は重要であろう。しかし、先行論の中では、浮舟の情報が人々の世間話やうわさの中で語られることこそ論じられてきたものの、それが「物語」の「ついで」に語られるという表

現を伴う点に関しては、管見の限り、あまり注意されてこなかった。⁽¹⁾後述するが、浮舟は他の登場人物に比べ、「物語」の「ついで」に語られる例が特に多いのである。浮舟と、人々の語る「物語」との関わりを考える上で、手がかりとなる問題と思われる。

また浮舟は、物語作品を鑑賞する姿や、自らの心を慰めるような歌を手習として書きつける姿、そして心中を声に出して語る姿を見せてもいる。このように「物語」と深い関わりを持つ浮舟は、『源氏物語』という長大な「物語」作品の終局に置かれる女君でもある。そうした浮舟の物語の意味については、小林「一九八六」によつて、「さまざまな引用の「差異の網目」に変容してしまつた源氏物語」が「夢」のように「解体」していく様相が読み解かれていく。また吉井「二〇〇八」は、浮舟が「沈黙」を続ける描写から、物語そのものもまた「沈黙」へ辿り着こうとしているとする。一方で、池田「二〇〇一」は「円環」のように「浮舟の〈手習〉の行為の中に」「物語行為のはじまりが暗喩」されているとし、それより更に踏み込んだ形で神田「二〇〇一」は、浮舟が「物語作者に大転身し得る」と論じている。こうした物語作者にも通じる浮舟のあり方は、繰り返される手習や、自らの心中を語り出す様相から導かれるものであろう。三谷「一九九二」によつても、「一人称的に実存する浮舟」として、語り手と捉えうるあり方と解される。

このように浮舟と物語の作り手、語り手とを重ねる見方に対し、三田村「一九九六」において、浮舟が「徹底して〈音〉を聞き続ける存在として造型されている」と指摘される点は重要であると考える。なお、この三田村論文で

Abstract

は、「浮舟」巻までの浮舟を「聞き続ける存在」とみており、「浮舟」巻以降については、「聞く」場面は出て来ないわけではないが「主題性を担う方法を別のものに明け渡してしまっているように見える」とする。ただし同論文の末尾の注の中では、「手習」巻後半以降の「再び聞き始める浮舟」にふれ、浮舟に関する「語り」が「手習」巻の後半に張りめぐらされていることは「重要な問題を提起していると言えよう」と示唆している。

本稿は、「手習」巻以降、『源氏物語』の最後に置かれた浮舟の聞く態度を、「ついで」とあわせて重要視する。「物語」と深く関わる浮舟は、「物語」の「ついで」に語られ続ける一方で、『源氏物語』の最後には、「ついで」ではなく「物語」のうちに語られる例が散見される。そうした例のなかで、浮舟は、自らに関する「物語」を聞く姿を見せているのである。浮舟が「ついで」に語られることを手がかりとし、物語の終わりに、浮舟の聞く姿が語られることの意味はいかなるものであるか、考察したい。

本稿の構成は次の通りである。第一節では、浮舟がなんらかの「ついで」に語られる例の多い女君であることを確認し、「ついで」の持ち得る意味を検討する。第二節では、「ついで」のなかでも特に「物語」の「ついで」に語られることの意味を、浮舟の物語の内容とあわせて考える。第三節では、一、二節での検討とは逆に、浮舟が「ついで」ではなく「物語」のうちに語られる例を検討し、そうした例の一部で、自らに関する「物語」を聞く浮舟の姿が語られることの意味を考える。他の登場人物たちによって語られ続けてきた浮舟は、最後には自らの「物語」を聞く姿を見せる。聞く浮舟の姿が語られるなかで、物語が終わりを迎えていくことの意味を論じる。

一 「ついで」に語られる浮舟と物語の場

本節では、浮舟がなんらかの「ついで」に語られる例の多い女君であることを確認した上で、そうした表現が何を示すか、考察する。

『源氏物語』全体における「ついで」の用例は、およそ二二七～二二九例(正編一五九～一六一例、続編六七例)ほどである。『古語大辞典』(小学館)によれば、「ついで」には「①次第。順序。序列。②機会。おり。」の意味がある。本稿

では②の意味の中でも「ついで」をきっかけとして何らかの情報が語りだされる場合に注目する。

「ついで」をきっかけとして後に何らかの情報が語り出される例は、稿者が確認した限りおよそ九三～九四例(正編五八～五九例、続編三五例)ほど見られた。中でも、「ついで」を伴って浮舟の情報を語り出す例は、一五例であり、全登場人物の中でも最も多い。他に「ついで」を伴って語られる人物としては、浮舟の次に例が多いのは女三の宮(四例)、玉鬘(三例)、末摘花(三例)等である。その他、様々な人物や事柄に一～三例程度の用例数で分散しており、浮舟ほど集中して「ついで」に語られる存在は他にない。

浮舟が「ついで」に話題にされることは、秋山「二〇一一」で少し触れられ、「もののついで」であるのに注意したい。まともな要件であってはならない。それも薫の身分・立場ゆえである」とされるように、薫から浮舟に対する扱いの軽さを示すといった指摘がなされている。しかし、『古語大辞典』(中田「一九八三」)における「ついで」の「語誌」(原田芳起執筆)が示すように、「機会」「おり」を意味する「ついで」の用法には展開があり、元々『古今和歌集』の頃には「まだ後句が前句に対して副次的になる意味にはなっていない」のであった。ようやく『後撰和歌集』の頃に「後句が明らかに副次的ついたりとなされる例が混じ」るのである。また、浮舟に関わらない「ついで」の例を見ると、女三の宮や斎宮の女御といった高貴な女君も、「ついで」に語られている。したがって、浮舟の扱いの軽さを示す表現とのみ解すべきではないだろう。

以下に、「ついで」に浮舟の情報を語り出す一五例全てを掲出する。なお、シロヌキの丸付数字は浮舟が「物語」の「ついで」に語られる例(八例)を示し、クロヌキの丸付数字は「物語」という言葉を伴わず「ついで」に語られる例(七例)を示す。

①中の君、薫の懸想を避けるべく浮舟を紹介する。

「中の君」「人形ひとがたのついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」
(宿木④四四九)

②薫、弁と思ひ出話をする中で浮舟のことを言ひ出す。

……昔物語などせさせたまふ。故権大納言の君の御ありさまも、聞く人なきに心やすく、いとこまやかに聞こゆ。(中略)故姫君の御事どもはた尽きず。(中略)さて、ものついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。
(宿木⑤四五七～四五九)

③ 薫、弁に浮舟の様子を尋ねる。

……簾のつま引き上げて物語したまふ。几帳に隠るへてあたり。言のついでに、「薫」かの人は、先つころ宮にと聞きしを……(東屋⑥八五)

④ 母中将の君、中の君に窮状を訴える。

〔母中将の君〕……あはれになむ思うたまへらるる御心深さなる」など言ふついでに、この君をもてわづらふこと、泣く泣く語る。
(東屋⑥四七～四八)

⑤ 薫、女二の宮に浮舟引き取りの了承を得る。

女宮に物語など聞こえたまひてのついでに、「薫」なめしともや思さんと、つつましながら、さすがに年経ぬる人はべるを、……
(浮舟⑥一六一)

⑥ 内舍人、薫の命を受け警備を強化させると右近に話す。

〔内舍人〕……雑事ども仰せらるるついでに、かくておはしますほどに、夜半、暁のことも、なにがしらかくてさぶらふと思ほして、……
(浮舟⑥一八三)

⑦ 中将、少将の尼に浮舟のことを尋ねる。

……あはれなりし昔のことどもも思ひ出でたるついでに、「中将」かの廊のつま入りつるほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、……
(手習⑥三〇八)

⑧ 中将、弟禪師の君に、浮舟のことを尋ねる。

禪師の君、こまかなる物語などするついでに、「中将」小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。(中略)などのたまふついでに、「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。……」
(手習⑥三二〇～三二二)

⑩ 中将、妹尼に浮舟のことを尋ねる。

いとどいや目に、尼君はものしたまふ。物語のついでに、「中将」忍びたるさまにものしたまふらんは、誰にか」と問ひたまふ。
(手習⑥三二二)

⑪ 横川の僧都、明石の中宮に浮舟のことを語る。

御物の怪の執念きこと、さまざまに名のるが恐ろしきことなどのたまふついでに、「横川の僧都」いとあやしう、稀有のことをなん見たまへし。(中略)とて、かの見つけたりしことどもを語りきこえたまふ。
(手習⑥三四五)

⑫ 薫、明石の中宮に浮舟を喪った悲しみを語る。

御前のだやかなる日にて、御物語など聞こえたまふついでに、「薫」あやしき山里に、年ごろまかり通ひ見たまへしを、……」(手習⑥三六三)

⑬ 明石の中宮、小宰相に対し、僧都の話を薫へ伝えるよう指示する。

〔明石の中宮〕……かたはならむことは、とり隠して、さることなんありけると、おほかたの物語のついでに、僧都の言ひしこと語れ」とのたまはず。
(手習⑥三六四)

⑭ 小宰相、薫に僧都の話を伝える。

立ち寄りて物語したまふついでに、言ひ出でたり。(手習⑥三六五)

⑮ 薫、浮舟の情報を求めて明石の中宮に対面する。

……など思ひ乱れて、なほのたまはずやあらんと思へど、御気色のゆかしければ、大宮に、さるべきついでつくり出でてぞ啓したまふ。
(手習⑥三六六～三六七)

浮舟は、「宿木」巻でその存在が話題に上る当初から「人形のついで」に語り出され(①)、「手習」巻まで「ついで」に語られる例の多い女君であるとなせよう。また、これら一五例の場面は、いずれも浮舟不在の状況であった点にも注意したい。
では、こうした「ついで」に語るといふ表現は何を示すだろうか。「ついで」に関して、石井「一九八七」は、「物事の「偶然性」を言い当てたことば」である点を指摘している。またそれを踏まえて飯沼「一九八一」は、「ついで

「で」は、物語において鍵となることば」であり、「ある事実が「ついで」に話されたことによつて、後の話の筋を大きく展開させ、盛り上げてゆくのである」とした。「ついで」は、物語の展開に関わりを持つ言葉だと見えよう。加えて、森「二〇二一a」は「物語の場」の物語が対象化されようとする瞬間、しばしば「ついで」という語があらわれる」点を指摘している。以上の点を踏まえ、『源氏物語』を見ると、次のように特徴的な「ついで」の例を見つけることができる。

……しばし聞きたまふに、この近き母屋に集ひるたるなるべし、うちさ
さめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし、……（中略）
など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、
かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時、などおぼ
えたまふ。
（帚木①九四―九五）

……いますこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさくも
のうければなむ、いままたもついであらむをりに思ひ出でてなむ聞こゆ
べきとぞ。
（蓬生②三五五）

これら二例は、物語世界内に存在する作中人物が、『源氏物語』に語られる内容を聞きとる様を語る場面である。「帚木」巻では、源氏の行状が間違つた形で紀伊守邸の女房に伝わっていることを、他ならぬ源氏自身が聞きとり、「かやうのついで」に藤壺との密事が露顕するのではないかと恐れを抱いている。また、「蓬生」巻の末尾では、「蓬生」巻の語り手とらしい人物（恐らく「侍従がをばの少将」であろう）³から、「蓬生」巻の後日談を聞きとる様が語られている。ここでは、「ついで」の折に続きを語ろうという語り手の意志が示されている。「ついで」によつて物語の場が意識されるとは、「語り手」「聞き手」「素材」という、物語の語られる場を構成するものが意識されている、ということでもあるだろう。語り手の存在と同時に、その話を聞く聞き手の存在が見えやすくなり、『源氏物語』そのものが語られる場をも意識させられるのである。

勿論、「ついで」が常にここまでのはつきりと「物語の場」を意識させるものであるとは言えない。また「ついで」という言葉を伴わずとも、何らかの

物語が語られる時には当然語り手だけではなく聞き手が存在し、物語の場があるということになる。しかし、小森「二〇二二」が「聴き手」は常に、言葉の向こう側において、言葉としては姿をあらわさない」と言うように、聞き手の存在は基本的には意識されにくい。それに比べて、「ついで」という言葉があらわれ、その後何らかの情報が語り出される箇所においては、物語の語られる場を構成する語り手、素材、そして聞き手の存在が、通常よりも見えやすく示されていると考えるのではないだろうか。それは浮舟の物語に限った話ではないが、浮舟の場合、「ついで」としてその情報が語りだされる例が他の登場人物に比べ特に多く、「宿木」巻で初めてその存在が示される時から「手習」巻で生存の情報が伝播していく時まで続いているのである。

また、そうした例のうち半数以上で、「ついで」に付随して「物語」という言葉そのものが示されている。「物語」という語、そして物語の語られる場を意識させる「ついで」が、浮舟にまわりつくように語り進められているのである。加えて浮舟は、既存の物語作品に似た境遇の女君であることを、作中人物たちの印象として繰り返し様々に確認されている女君でもあつた。⁴「手習」巻まで、浮舟は「ついで」に語られる場に不在でありながら、「物語」そのものを意識させるよう語られていると言えよう。

人々の語る言葉の中で存在が示され、うわさ話の素材となり続ける浮舟の物語は、「ついで」という言葉を通して、それを語る語り手、その素材、さらに通常は注意されにくい聞き手の存在といった、物語の語られる場を構成するものを意識させる傾向が認められるのではないだろうか。

二 「物語」の「ついで」と浮舟

第一節では、「物語」という言葉が「ついで」とあわせて、浮舟にまわりつくように物語の語られる場を意識させるものであることを示してきた。本節では、浮舟以外に関する情報を語る「物語」の「ついで」を確認した上で、浮舟の物語自体の内容とあわせて、「物語」の「ついで」という表現が持つ意味を考える。

「ついで」に語られる例の多い浮舟は、その半数以上で「物語」の「ついで」に語られる女君でもあった。『源氏物語』全体を通して見ると、「物語」の「ついで」あるいは「物語」する「ついで」などの類いは全部で二一例あるが、そのうち、八例が浮舟について語り出すものである。「物語」の「ついで」に語りだされる対象は、浮舟を除くと、源氏、斎宮の女御、女三の宮、八の宮など、様々であり、各一、二例ずつ分散している。浮舟の次に「物語」の「ついで」に語られる人物は玉鬘だが、その数は三例と、浮舟の八例に比べると少ない。浮舟ほど「物語」の「ついで」に語られ続ける人物はいないと思なせよう。

まず、『源氏物語』における「物語」の「ついで」という表現を確認する。すると、語り出される内容に女君の話題が多いことに気づかされる。

・このころ大臣「源氏」の参りたまへるに、御物語こまやかなり。事のついでに、斎宮の下りたまひしこと、さきさきものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、……
(総合②三七四)

・この後見どもの中に、重々しき御乳母のせうと、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるに会ひて物語するついでに、「上なむ、しかじか御気色ありて……」
(若菜上④一九)

・例のさまざまなる御物語聞こえかはしたまふついでに、宇治の宮のこと語り出でて、見し暁のありさまなどはしく聞こえたまふに、宮「匂宮」と切にをかしと思いたり。
(橋姫⑤一五三)

朱雀院が斎宮の女御のことを、左中弁が女三の宮のことを、薫が宇治の姫君たちのことを、それぞれ話題にする際に、「物語」の「ついで」というきっかけを用いている。「物語」の「ついで」に語らう際には、女君に関する情報を語るもしくは聞きとるといった目的がある場合が多いとみなせそうである。直截に女君の事を問うたり、女君側の女房や父親等がすぐに女君の事を語ったりするのではなく、なんらかの「ついで」をきっかけに、それとなく話題を移そうとするのである。こうした女君に関わる情報を語るもしくは聞きとる際にあらわれる「ついで」は、『落窪物語』、『うつほ物語』、『采花物語』

等にも見られる。

・かたみに隔てなく物語しけるついでに、このわが君の御事を語りて、(中略)よき人の女など人に語らせて、人に問ひ聞きたまひ、ついでに、帯刀、落窪の君の上を語り聞こえければ、……
(『落窪物語』巻一 一一)

・こと静まりて、これかれ御物語のついでに、春宮、「今日ここにもおしたまふ人々の中にこともなき娘、誰持たうびたらむ」。
(『うつほ物語』「嵯峨の院」一七二)

・東宮の十五六ばかりにおはしましけるに、ある僧の経高く読みければ、つねに夜居させて世の物語申しけるついでに、小一条殿の姫君の御事を語り聞こえさせるに、宮、御耳とどまりて思しめして、……
(『采花物語』「みはてぬゆめ」一八四)

これらの例はいずれも、なんらかの形で女君の情報を語り出すものであった。区切りなしに続いていく談話ではなく、語りたい内容や、聞き取りたい内容、すなわちある程度まとまりをもった情報を求める際に、「ついで」というきっかけを置いて話題を区切ることが必要とされるのであろう。このことは、第一節で論じた、「ついで」という言葉があらわれる時に物語の語られる場を構成するものが意識されやすくなる、ということとも符合する。ただし、その内容は女君のことに限らない。例えば夜居の僧都の密奏の場面では、源氏と藤壺の秘事は「しめやかなる御物語のついでに」語り出されている(薄雲②四五三)。ここで示されている「物語」は、内容を推定することが難しい。内容を示さない世間話程度の意味あいであろう。そういった内容不明の「物語」とは異なる情報を語り出す際に、「ついで」という言葉で一つの区切りが示されているとみなせよう。この場合、「ついで」の前後の内容の重要度の差ではなく、わざわざそれまで話していた「物語」とは内容を区切るような形で情報が語り出されていることに注目したいと思う。

加えて浮舟は、薫からの懸想に関わる場面以外でも、「物語」の「ついで」に語られていた(⑩⑪⑫)。その三例は、いずれも失踪した浮舟の生存情報が伝播していく場面であった。浮舟は人々のうわさ話という物語の中で語られながらも、表現としては「物語」の「ついで」なのだと思われている。それ

まで語られてきた「物語」から区切りを置き、外にあるかのようなイメージを付されているのではないだろうか。すなわち浮舟は、語られると同時に物語の外側に置かれるような印象を与えられていると考える。

以上を踏まえあらためて「物語」に関わる浮舟の特徴的なあり方をとらえてみると、次の三点が注目される。第一に、浮舟は『源氏物語絵巻』『東屋二』にも描かれることで知られるように、中の君と共に「物語」を鑑賞する姿を語られていた。

・ 絵など取り出でさせて、右近に詞読ことばませて見たまふに、向ひてもの恥ぢもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる灯影ほかげ、さらにこと見ゆるところなく、こまかにをかしげなり。

(東屋⑥七二―七三)

右の場面は、物語作品の中にモノとして物語作品が存在するという、入れ子のような構造になっている。浮舟は物語作品の作中人物でありながら、物語そのものを外側から見つめているのである。

第二に、失踪後小野に辿り着いた浮舟が、快復し妹尼たちと生活する中でしきりに手習をすることである。この手習に関して、松井「二九八四」は「浮舟にとつての手習とは心を鎮め、さらには自らの歌という、文字として外在化された自己を見つめ直してゆくことをも意味しているのである」と指摘している。また吉野「二〇一一」は、「蘇生後の浮舟の手習は、思考の過程でこぼれ落ちてしまったかもしれないものを、歌をすすんで「書く」ことによつて、みずから見つめようとしていることを表わしていた」とする。手習に書きつけられた歌が浮舟の本心をそのまま表わすものであるかは問題の残るところであるものの、少なくとも浮舟は、過去の体験に基づき自らの思いを書こうとしていると言えよう。これもまた文字として書き起こされた思いを外側から見つめようとしている場面である。

第三に、「手習」巻における中将の存在である。浮舟が手習を続ける中で現れるのが、中将と呼ばれる男君である。この男君は仏道への関心等、薫の相似形であることが指摘されている。たとえば小野村「一九七〇」は、「薫に共通する特徴が中将に与えられている」ことを指摘し、「中将は浮舟の脱出しようとした自然的な「あはれ」の世界的象徴として浮舟に迫る」という

点に、宇治十帖全体を論じる中で言及している。中将と薫の類似は、中将の登場する次のような場面等に顕著に見ることができる。

・ 横川に通ふ道のたよりによせて、中将、ここにおはしたり。前駆さきうち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出だして、忍びやかにおはせし人の御さまけはひぞさやかに思ひ出でらるる。(中略)いろいろの狩衣姿の男どもの若きあまたして、君も同じ装束きょうそくにて、南面みなおもてに呼び据ゑたれば、うちながめてあたり。年二十七八のほどにて、ねびととのひ、心地ならぬさまもてつけたり。

〔手習〕⑥三〇四―三〇五頁

中将の登場は、中将の年齢や官職等を含め、浮舟が体験した薫との過去に重ねられるかのように語られている。浮舟に対し、自らの過去の物語をもう一度突きつけるものと解せるだろう。このことは、「物語」の「ついで」という表現の持つ意味、すなわち浮舟が「物語」の外側にあり、「物語」を見つめる存在であるという印象を与えてきたことにもつながると思われる。

以上の三点を見ると、物語の内容としても、浮舟は物語というものを外側から見つめる、あるいは再現された自らの体験、すなわち『源氏物語』の過去の物語内容に重なる言葉、そして光景を見つめる姿がたびたび語られているとわかる。「東屋」巻ではモノとして存在する物語作品を鑑賞している。そして、手習行為においては文字として自らの過去の経験に基づく言葉を書きつけようと試みていた。「手習」巻の中将からの懸想においては、あたかも薫を再現するかのような形で、過去の物語そのものがもう一度突きつけられようとしているのである。

「物語」の「ついで」は、それまで話していた「物語」とは異なる、一つの区切りを置いた内容を語り出す際に示されていた。第一節の内容を踏まえると、「物語」の「ついで」を通して、浮舟は「物語」の語られる場を意識させると同時に、浮舟自身は「物語」の外側に置かれるかのような印象を与えることがたびたびあったとみなすことができる。そしてこのことは浮舟の物語の内容ともつながるのではないだろうか。浮舟は様々な角度から「物語」そのものをつながる女君であり、同時に浮舟自身も「物語」を外側から見る様を語られているのである。

三 自らの「物語」を聞く浮舟

浮舟に、物語の語られる場を意識させると同時に、自身は「物語」の外側に置かれるかのような印象が与えられているとすると、そのことはどのような意味を持つだろうか。その際注意したいのは、浮舟が、「宿木」巻から「手習」巻での生存情報の伝播まで「ついで」に語られ続けてきたのに対し、浮舟の物語の後半、すなわち「蜻蛉」巻以降に至ると、「ついで」ではなく「物語」のうちに語られる例が散見される点である。本節では、そうした例を確認した上で、『源氏物語』の最後に、浮舟自身について語る「物語」の場で、それを聞く浮舟の姿が語られる様相を、「物語」の「ついで」が持つ意味を踏まえて考察する。

以下に浮舟の情報が「ついで」を伴わず「物語」の中で語られる例(四例)を掲出する。

(1) 薫、匂宮に浮舟失踪後の悲しみを語る。

やうやう世の物語聞こえたまふに、いと籠めてしもはあらじと思して、「(中略)昔、御覽ぜし山里に、はかなくて亡せはべりにし人の……」
(蜻蛉⑥二九)

(2) 下人、八の宮の姫君の葬儀について語る。

……物語などして言ふを聞けば「故八の宮の御むすめ、右大将殿の通ひたまひし、ことになやみたまふこともなくてはかに隠れたまへりとて……」
(手習⑥二八九)

(3) 浮舟、小君との対面を泣き妹に弁解する。

「浮舟」「……いかにもいかに、過ぎにし方のことを、我ながらさらになえ思ひ出でぬに、紀伊守とかありし人の世の物語すめりし中になん、見しあたりのことにやと、ほのかに思ひ出でらるることある心地せし。……」
(夢浮橋⑥三八九)

(4) 浮舟、小君との対面を固辞し臥す。

「妹尼」「……」など言ひ騒ぐも、うたて聞きにくくおぼゆれば、顔も引き入れて臥したまへり。主「妹尼ぞ、この君(小君)に物語すこし聞

「物語」を聞く浮舟

こえて、「物の怪にやおはすらん、例のさまに見えたまふをりなく、なやみわたりたまひて、御かたちも異になりたまへるを、(中略)」と聞こゆ。(中略)「妹尼」「げに」など言ひて、かくなむと移し語れども、ものたまはねば、かひなくて、……」
(夢浮橋⑥三九三―三九四)

浮舟の情報が「ついで」を伴わず「物語」の中で語られる例は、いずれも浮舟が失踪した後、つまり「蜻蛉」巻以降のものである。特に、うち二例は「夢浮橋」巻にあった。

まずは、(1)の「蜻蛉」巻と、(2)の「手習」巻の例について検討する。(1)は浮舟失踪後、薫が匂宮を見舞い悲しみを語る場面で、薫が「ついで」ではなく「物語」の中で浮舟のことを語り出す。このように女君の死後、残された男君が「物語」をして思い出を語るといふ展開は、正編より見られる典型に則ったものであろう。(2)では僧都を訪ねた下人が八の宮の姫君、つまり浮舟の葬儀について、それと知らずに浮舟の近くで語るが、瀕死の状態からようやく少し言葉を発するようになったばかりである浮舟の反応は語られない。

(3)、(4)は「夢浮橋」巻の例である。(3)では、小君との対面を泣く浮舟が、妹尼に対し自分の思いを声に出し語る。ここで浮舟は、「紀伊守とかありし人の世の物語すめりし中」で、自分自身に関する話を聞き、「思ひ出でらるることある心地」がしたとして語っている。この(3)で浮舟が示す「紀伊守とかありし人の世の物語」が語られる場面は、以下にあたる。

……わが親の名とあいなく耳とまれるに、また言ふやう、「紀伊守」(中略)その御妹、また忍びて据ゑたてまつりたまへりけるを、去年の春、また亡せたまひにければ、「(中略)」と言ふを聞くに、いかでかはあはれならざらむ、人やあやしと見むとつつましうて、奥にむかひぬたまへり。(中略)「紀伊守」「この大将殿の御後ののは、劣り腹なるべし。(中略)」など語る。(中略)尼君、「光る君と聞こえにけん故院の御ありさまには、(中略)」とのたまへば、「紀伊守」「それ(夕霧)は、容貌もいとうるはしくきよらに、(中略)兵部卿宮ぞいといみじくおはするや。(中略)」など、教へたらんやうに言ひつづく。あはれにもをかしくも聞くに、身の上も、この世のこととおぼえず。とどこほることなく語りおきて出でぬ。

(手習⑥三五七～三六〇)

ここでは、薫が浮舟を隠していた事情や、浮舟の出自について、ほぼ正しい情報が語られている。また、妹尼の応答では「光る君」にふれられ、紀伊守の話も夕霧と匂宮の評価にまで及ぶ。「教へたらんやうに」語られた紀伊守の話を、浮舟は周囲に怪しまれないよう気をつけながら聞いていた。浮舟は(3)で、小君との対面を拒む中、その話を「物語」を聞きとつたとして話題に上らせたのである。

そして続く(4)で、自らの考えを話し終えた浮舟は、小君に應對するよう求める妹尼の声を「聞きにくく」思い、沈黙し、顔も隠して臥してしまう。妹尼はそうした浮舟に代わって、小君に「物語」をする。その内容は、失踪し小野に辿り着いた後の浮舟の事情を簡略に語り直すものである。浮舟は妹尼の話す浮舟自身の「物語」を、聞きたくないという態度を示しながらも、否応なしに聞かされている。沈黙し臥してなお、「物語」を聞かされ、付き合わされる浮舟の姿を語るものと言えるだろう。

(3)、(4)のように、浮舟が自らについての「物語」を聞くことに関し、神田「二〇〇二」が、浮舟が紀伊守の「物語」を聞く姿は「浮舟自身による噂の回収を意味しよう」と指摘している。だが、浮舟に関する情報を含んだ「物語」を浮舟が傍らで聞いているという状況からは、異なる次元における意味を読み取りうる。こうした世間話は、それ自体が「物語」という言葉で表されていると同時に、『源氏物語』そのものに重なる内容を有している。すなわち、『源氏物語』中で既に語られた内容が、登場人物の口から、もう一度語り直されるまさにその場に浮舟がいて、その内容を聞きとつていたのである。その内容は、浮舟自身について語るものであった。このように自らに関する「物語」を聞く浮舟は、物語の聞き手のごとき立場にあると考えられるのではないだろうか。

なお、浮舟が中将の懸想を避けるべく老尼君たちの部屋へ逃げ込んだ際には、自らの経験を思い出す浮舟に寄り添うような語り方がなされている。

・昔よりのことを、まどろまれぬままに、常よりも思ひつづくるに、いと心憂く、親と聞こえけん人の御容貌も見たてまつらず、遙かなる東国を

かへるがへる年月をゆきて、……

(手習⑥三三二)

三谷「二〇〇七」はこの場面を、「その錯綜する表現不可能と云つてよい浮舟の経験が、この心中思惟の詞では、浮舟巻とは異なった、別の〈物語〉となっている」とし、「特性ある物語論」でもあると位置づけた。「手習」巻が、浮舟の経験、すなわちこれまで『源氏物語』に語られてきた浮舟の物語そのものを形を変えつつ語り直す様相を持つことは、中将の登場等からも見ることが出来るだろう。また浮舟自身も、手習行為や、(3)の場面で自らの言葉を声に出して語る姿に見られるように、繰り返す自らの心中を言葉にしようとして試みてもいる。従来の浮舟論は、この手習行為や自らの思いを語り出す姿を最後の浮舟のあり方ととらえる傾向が強かったが、こうした点に加え、浮舟がこれまでの作中人物に比べて特殊であるのは、他者の語る自らの「物語」を聞くことであろう。

小森「二〇一一」は、「ある言説が発話されているとき、沈黙を守り続けるのが「聴き手」であるとする。沈黙を続ける最後の浮舟の姿勢からは、少なくとも物語内においては、「聞く」姿を見るべきであろう。手習をする浮舟の姿は、あくまで「手習」巻で語られるものであり、物語の一番最後の浮舟のあり方ではない。「手習」巻の終盤、そして「夢浮橋」巻という掉尾においては、聞く浮舟がいるのである。

浮舟ははつきりと「聴く」態度を見せているわけではないが、確かにその言葉に「あいなく耳とま」り、「あはれにもをかしくも聞」いていたという。そして、浮舟が聞いた紀伊守の「物語」には、浮舟の出自や薫との事情といった情報が含まれていた。こうした情報を先に聞いたのは紀伊守であり、彼の教えるかのような語り口の中で諸々の情報が一つの「物語」としてまとめられ、浮舟を含めた周囲の人々に共有されている。浮舟がそうした自らに関する「物語」を聞く姿からは、浮舟が自らの物語の聞き手とも言いうる立場へ変化している様相を読み取れるのではないだろうか。加えて、(4)で妹尼が語る浮舟に関する「物語」は、『源氏物語』における最後の「物語」という言葉の用例でもある。『源氏物語』の最後の「物語」は、浮舟によって聞きとられているのである。

「物語」の「ついで」に、不在のまま他の登場人物たちに語られ続けてきた浮舟は、一方で物語の語られる場を意識させ、物語の外側に置かれるかのようなイメージを付与されてきた。ついに、自らの「物語」を聞く浮舟の姿が語られる中で、物語は終わりを迎えているのである。

四 聞き手としての浮舟——結びにかへし——

「ついで」という言葉があらわれる箇所においては、物語の語られる場を構成するものが、通常よりも見えやすい形で示されると考えられる。物語の語られる場は、語り手、素材、ひいては通常注意されにくい聞き手の存在で構成される。浮舟は、『源氏物語』中の他の登場人物と比べ、「ついで」に語られる例が多く、「ついで」に付随して「物語」という言葉そのものまでもが示される例が多い。「ついで」を通して、浮舟はその場に不在でありながら、物語の語られる場を構成するものを意識させる傾向にあると考えられた。

また一方で、「物語」の「ついで」に語られることを通して、浮舟自身は「物語」の外側に置かれるかのような印象を与えていると思われる。浮舟の物語の展開とあわせて考えても、浮舟は物語作品を鑑賞する姿や、過去の自らの経験、すなわち過去の物語の内容を繰り返すような状況と向き合わされる姿がたびたび語られている。「物語」のうちに語られることと、「物語」を外側から見つめるような姿の双方が、浮舟という一人の女君に重ねられているのである。浮舟は、「ついで」に加え、物語内容としても、様々な角度から、「物語」そのものとながりが結びつく様子が示されている女君といえよう。

浮舟は「宿木」巻から「手習」巻での生存情報の伝播まで「ついで」に語られ続けていくわけであるが、浮舟の物語の後半に至ると、「ついで」ではなく「物語」のうちに語られる例が散見される。その中には、浮舟自身が浮舟に関する「物語」を聞きとる状況を語るものがあった。『源氏物語』の最後の「物語」の用例も、妹尼が浮舟の事情を語るものであり、その傍では臥して拒もうとしながらも、最後まで自らの「物語」を聞かされ続ける浮舟の姿が語られるのである。

「物語」の「ついで」という表現を通して物語の語られる場を構成するもの、すなわち語り手、素材、聞き手の存在が意識されやすい浮舟の物語は、しかし一方で、語られる素材である筈の浮舟自身はその場に不在であり、「物語」の外に置かれているような印象をも与えていた。一連の「ついで」の表現は、最後の最後で、自らの「物語」を聞く浮舟の姿が語られることへの布石と捉えられる。浮舟不在のまま語られ続けた「物語」は、「ついで」により聞き手の存在への意識、および浮舟が物語の外側にあるという印象を与えながら、最後には自らの物語を聞き手のごとき立場で聞きとる浮舟の姿へと収束していく。「物語」そのものと常に付き合わされてきた女君が、『源氏物語』の最後に、自らの「物語」を聞かされる中で、物語は終わりを迎えるのである。

自らの「物語」を聞くという浮舟のあり方は、この最後の女君に感情移入、あるいは肩入れするように読み進めてきた『源氏物語』の読者たちの姿と照応するしくみとも考えられる。物語を語り出す、書き出すといった姿勢とはまた異なる形で、物語の円環構造の如きものが意識される。それまで『源氏物語』という物語作品の中で語られていた筈の女君が、最後に聞き手として『源氏物語』そのものに重なる自らの物語を共有し、引き取っていくのである。なお、このような浮舟のあり方は、「手習」巻の後半で紀伊守たちの語る「物語」に「光る君」の呼び名があらわれ、『源氏物語』続編のみならず正編の内容までもが意識されることとの関係も留意される。こうした点を含めて、『源氏物語』中にあらわれる「物語」の持つ意味の考察を今後も続けていきたい。

※古典作品の引用本文は次に示す本に依拠している。ただし、他の諸注釈等を参照し、一部私に表記をあらためた箇所がある。

・『源氏物語』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』、新編日本古典文学全集25 源氏物語⑥、小学館（一九九四～一九九八）

・『うつほ物語』……室城秀之校注『うつほ物語 全 改訂版』おうふう（二〇〇二）

・『落窪物語』……三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二校注・訳『新編日本古典文学全

集17 落窪物語／堤中納言物語 小学館（二〇〇〇）
 ・『采花物語』……山中裕・池田尚隆・秋山虔・福長進校注・訳『新編日本古典文学全集31 采花物語①』（『新編日本古典文学全集33 采花物語③』（一九九五～一九九八）

※『源氏物語』の用例数を示す際には、池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社（一九五三～一九五六）、平安文学ライブラリー（日本文学 web 図書館）、上田英代『古典総合研究所』<http://www.genji.co.jp/>（二〇一九年二月一日閲覧）を併用して確認した。

注

- (1) 「物語」の「ついで」という表現に関して、安藤「二〇〇八」は「相互に語り、そして聞く」人々を捉えるなかで、「ついで」としての「物語」とは何か、あるいは「物語のついで」に語られるのは何か（それは「物語」とどのような関係があるのか）といった問いも、考察に値する」と示唆しているが、そこにとどまる。
- (2) 「ついで」に関する部分で、本文に二箇所異なるがみられるため、用例数に変動が生じている。すなわち、i 古代学協会蔵大島本「つゐて」だが、定家本系他本多くに「つて」とある（若紫①二一七）、ii 古代学協会蔵大島本なし、他諸本に「きこえさせ給める院もことついでに」とあり、脱落と見て補入する説がある（若菜上④一一一）。
- (3) 三谷「一九九二b」は、「蓬生」巻の「語り手は、巻中に登場する「聞きし老人」II「侍従が伯母の、少将といひ侍りし老人」だと言ってよいだろう」とする。
- (4) 森「二〇一〇b」は、「物語は、(1)語り手、(2)聞き手、(3)素材の三条件によって成立し、その三条件が相互に規定しあう関係の中で進行していくのである」とする。
- (5) たとえば、浮舟の存在を知った「手習」巻の中將は、「昔物語の心地もするかな」との感想を抱く（手習⑥三一一）。また横川の僧都も、浮舟を助ける際「昔物語に、魂殿に置きたりけん人のたとひを思ひ出で」と語る（夢浮橋⑥二七六）。
- (6) 正編においても、夕顔の死後、源氏が「右近を召し出でて、のどやかなる夕暮れに物語など」をする場面（夕顔①一八三）等がある。なお「源氏物語」には、女君の死後、男君が女房を呼び集めて「物語」を共有するというパターンが複数個所で見られる。このことについては小泉「二〇一九」で検討した。

引用文献

秋山 虔 「二〇一一」 「形代」としての浮舟 『源氏物語の論』 笠間書院
 安藤 徹 「二〇〇六」 「物語と〈うわさ〉」 『源氏物語と物語社会』 森話社
 安藤 徹 「二〇〇八」 「物語」の言葉 糸井通浩・神尾暢子 編 『王朝物語のしぐさとことば』 清文堂出版
 飯沼清子 「一九八二」 「夜居僧都小論——密奏を起点として——」 『王朝文学史稿』 九

池田和臣 「二〇〇二」 「源氏物語」の言語状況——物語行為の喩としての、色好みのことば—— 『源氏物語 表現構造と水脈』 武威野書院
 石井正己 「一九八七」 「ついで」と「まことや」 藤井貞和 編 『王朝物語必携』 学燈社

井野葉子 「二〇一一」 「竹取引用群——浮舟巻を中心に、そして柏木・夕霧物語」 『源氏物語 宇治の言の葉』 森話社
 小野村洋子 「一九七〇」 「源氏物語の精神的基底の終局と物語の世界」 『源氏物語の精神的基底』 創文社
 神田龍身 「二〇〇二」 「情報」としての浮舟——欲望の沸騰点 『源氏物語II 性の迷宮へ』 講談社

小泉 咲 「二〇一七」 「源氏物語」 「蓬生」巻にみえる「物語」——古物語と老女房の関わりに注目して—— 『平安朝文学研究』 復刊二五

小泉 咲 「二〇一八」 「物語を評する言葉——『源氏物語』 「絵合」巻から——」 『平安朝文学研究』 復刊二六

小泉 咲 「二〇一九」 「源氏物語」 正編における人々の「物語」——共有と展開—— 『国文学研究』 一八八

小林正明 「一九八六」 「最後の浮舟——手習巻のテキスト相互連関性——」 『物語研究——特集・語りそして引用』 新時代社

小森陽一 「二〇一二」 「聴き手論序説」 『文体としての物語・増補版』 青弓社

中田祝夫 「一九八三」 「古語大辞典」 小学館

松井健二 「一九八四」 「浮舟再生物語における独詠歌の位置」 『日本文学論究』 四三

三谷邦明 「一九九二a」 「源氏物語と語り手たち——物語文学と被差別あるいは源氏物語における〈語り〉の文学史的位相——」 『物語文学の言説』 有精堂

三谷邦明 「一九九二b」 「読み」そしてテキスト分析の方法——蓬生巻の方法あるいは無明の闇への一歩—— 『物語文学の言説』 有精堂

三谷邦明 「二〇〇七」 「閉塞された死という終焉とその彼方（三）——浮舟物語を読むあるいは〈ものまぎれ〉論における彼方を越えた絶望——」 『源氏物語の方法』 〈ものまぎれ〉の極北 翰林書房

宗雪修三 「二〇〇二」 「話型に抗する物語——宇治十帖のテクスチュアリティ」 『源氏物語 歌織物』 世界思想社

森 正人 「二〇一〇a」 「堤中納言物語『このついで』論 『場の物語論』 若草書房

森 正人 「二〇一〇b」 「〈物語の場〉と〈場の物語〉序説 『場の物語論』 若草書房

吉井美弥子 「二〇〇八」 「夢浮橋巻の沈黙」 『読む源氏物語 読まれる源氏物語』 森話社

吉野瑞恵 「二〇一一」 「浮舟と手習——存在とことば——」 『王朝文学の生成』 『源氏物語』の発想・「日記文学」の影響』 笠間書院

Ukifune as a listener of *monogatari*: Through the case study of *tsuide*

Saki KOIZUMI

Abstract

The character of Ukifune in *The Tale of Genji* (*Genji monogatari*, c. 1008) is deeply interwoven with *monogatari* storytelling and narration. The present study takes cue from the expression of *tsuide*, which signals an ‘occasion’ for storytelling, and which has been hitherto unexplored as far as prior scholarship on Ukifune is concerned. In particular, it investigates the significance of Ukifune being narrated as a character who listens to the *monogatari* about herself towards the end of the novel.

The first section of this paper shows that, in comparison to the other characters in *The Genji*, Ukifune appears in a conspicuous number of narrative examples involving *tsuide*. What’s more, it points out the tendency of *tsuide* to exhibit awareness of the “place/space” (*ba*) from which the story is being narrated. The second section, in turn, presents the possibility that this use of *tsuide* creates the impression of Ukifune herself being placed outside of the narrated *monogatari*. This impression is further corroborated by the contents of her story. Finally, the third section of this paper explores the number of examples in the latter part of Ukifune’s arc which do not use *tsuide* and which place her within the *monogatari* being narrated. Among these examples, special attention is given to the significance behind the instances where Ukifune is narrated as listening to her own story, particularly at the end of the “Writing Practice” (Tenarai) and “The Floating Bridge of Dreams” (Yume no Ukihashi) chapters. Accordingly, the paper in question sheds light on the manner in which the narrative builds upon Ukifune as a figure continuously narrated via *tsuide* and, towards the end of the novel, converges it with the emergent figure of Ukifune as someone who consumes her own *monogatari* from the standpoint of a listener.